

「2016年10月9日事件」と「ロヒンギャ」

バングラデシュからの見方

高田 峰夫

広島修道大学

私は東南アジア学会の学会員ではないのですが、篠崎香織さんに声をかけていただいて、このパネルに参加しました。バングラデシュの主にムスリムのことを研究していて、最近彼らを追ってタイやミャンマーにも行くようになりました。そうしたなかで、ビルマ研究会の方々にはお世話になることも多いのですが、東南アジア学会ではおそらく初めてお目にかかる方がほとんどだと思います。

本日の報告¹⁾について、資料の出所だけ最初に言っておきます。資料はほとんどインターネット版で見えています。*The Daily Star*、*Dhaka Tribune*、*The Independent*、*The Observer*はいずれもバングラデシュの英字紙です。*Doinik Janakantha*はバングラデシュのベンガル語紙です。それからReutersのインド版や、*The Irrawaddy*や*Bangkok Post*などインドの英字紙も見えています。このように資料の大部分は英字紙で、一部ベンガル語紙の情報を混ぜてあります。

2016年10月9日に、ミャンマーのラカイン州の国境沿いに配置された警備ポスト複数が、ほぼ同時並行的にロヒンギャと見られる武装勢力の襲撃を受けました。この襲撃事件をきっかけにして、ミャンマー軍がラカイン州北西部マウンドー周辺の村々に対して、武装勢力の掃討作戦を開始して、現地では激しい混乱が起きました。

混乱を避けるために多くの人がバングラデシュ側に越境するという事態が発生して、その数は2016年末時点ないしは2017年の初めの時点で、おそらく7、8万人だろうと言われています。これはあくまでも「だろう」です。

今日の発表では、主にバングラデシュ側の資料に依拠して、事件に関する複数のタイムラインを併置し

て、それぞれのなかから立ち現れる異なる事件像を確認したいと思います。

ただし、今日の発表について、最初にお断りしておきたいことがあります。今日の発表のなかでは、ロヒンギャと呼ばれる人たちに対して、部分的にはかなり厳しい見方をすることがあります。それはあくまでもバングラデシュ研究の立場から学問的に見た限りのことであって、現在進行中のロヒンギャの人たちの流入問題などに関しては、当然、人道的な見地から可能な限り適切に対応するべきだということは、私も十分に心得ています。それを誤解されると困るので、その点だけは最初に断っておきます。

それとロヒンギャ問題については、時間の関係でまったく触れることはできません。代わりに資料の最後に文献を挙げておきましたので、興味がある方はそちらをご覧ください。

1. 大まかな「タイムライン」に沿っての検討

1. 一般に広く知られている(認められている)

タイムライン

それでは本題に入ります。一般に広く知られている、認められているタイムラインの話をしています。詳しくは資料(タイムライン①)を見ていただければと思います。

一般に広く知られているタイムラインを見ると、そこから受ける印象というのは、基本的に以下のようなものだと思います。何かちょっとした小競り合いがあって、それをきっかけにミャンマー軍がロヒンギャ人たち全体に対してむちゃくちゃをしている。あまりに迫害がひどいので、ロヒンギャの人たちはバングラデシュ側に「難民」として流出するはめになった。これは人道に対する罪だ。許しがたい。それなのにノーベル平和賞までとったアウンサンスーチーさんは動かない。こうした印象に基づき、ミャンマー軍だけではなく、アウンサンスーチーの姿勢に対しても批判が高まっているという状況があるように思います。

その前提には、「ロヒンギャと呼ばれる人たちは、ミャンマーのラカイン州に土着のムスリムである。確固とした実態があるのにミャンマー政府がそれを認めないのがいけない」という考え方があります。この考え方に立ちますと、「ロヒンギャという人たちは一方的に迫害を受けるかわいそうな人たちで、悪いのはミャンマー政府、軍、仏教徒だ」という構図でとらえることになるでしょう。

1) 以下の報告は2017年6月初めまでの状況に基づく。同年8月25日以後、さらに大きな展開があったが、それらの要素は、この議論には一切反映されていない。いずれ別の考察を行うつもりであるが、本報告は以上の限定付きであることをご理解いただきたい。

最初に場所と地名を簡単に確認しておきます。図3-1でミャンマーとバングラデシュの位置をまず確認しておきます。両国の国境地帯、問題は点線で囲ったあたりです。ラカイン州があって州都のシットウェ (Sittwe) があります。そのもっと北にマウンドー (Maungdaw) という都市があります。図3-2は両国の当該の地域を拡大した地図です。マウンドーがここにあって、すぐ向かい側にバングラデシュ側のテクナフ (Teknaf) というまちがあります。

2016年10月9日の事件以前にバングラデシュに入ってきたロヒンギャの人たちの主な難民キャンプが、一つはナヤパラ (Nayapara)、もう一つはクトゥパロン (Kutupalong) にあります。ミャンマーとの関係で重要なのはこれらの地域です。

図3-3はラカイン州の人口密度を示しています。人口に含まれるのはロヒンギャだけではないのですが、これを見ると圧倒的にマウンドーの人口密度が非常に高いことがわかります。これはなぜかと言うと、この大部分の人がロヒンギャと呼ばれる人たち、ムスリムだからです。異常な高さですね。

一般的に振りまかれているイメージは、これらの写真(図3-4)のような感じです。「ロヒンギャの人たちはかわいそう」、「こんな焼き討ちに遭ってしまって、ロヒンギャを救え」と言って、それに対して『「ロヒンギャは敵だ」と言う仏教徒はむちゃくちゃだ」というイメージです。



図3-1 関係諸国とロヒンギャ問題の当該地域
出典: Bizbilla画像 (<https://www.bizbilla.com/country-maps/myanmar-burma.html>) に筆者が加筆



図3-2 当該地域の拡大
出典: UNHCR作成地図を部分的に拡大 (http://www.dorsum.ch/wp-content/uploads/2012/11/Rakhine-Sate-Map_compr.jpg)

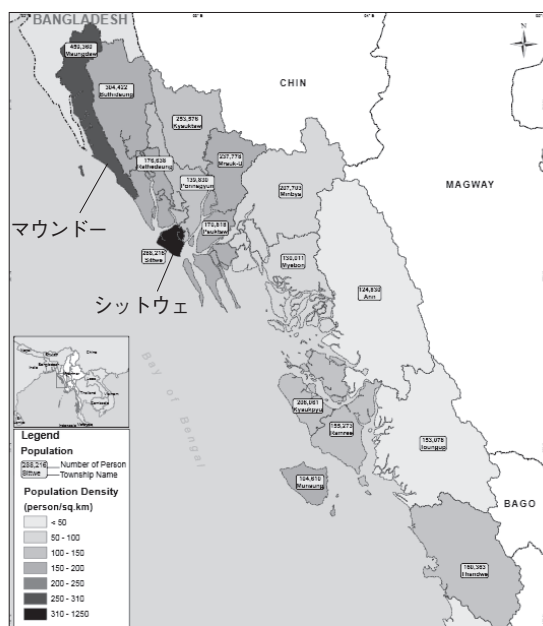


図3-3 ラカイン州の人口密度分布図
出典: Reliefweb地図 (<https://reliefweb.int/map/myanmar/population-population-density-map-rakhine-state-myanmar-2009>)



図3-4 ネット上に氾濫するロヒンギャ関連画像
「被害者」ロヒンギャと「加害者」仏教徒のイメージ
出典: 左上……Quora引用画像 (<https://www.quora.com/Why-did-India-not-send-forces-to-save-the-Rohingya-of-Indian-origin>)、
右上……Change.orgキャンペーン用 (<https://www.change.org/p/maya-abdel-megid-stop-genocide-save-the-rohingya>)、
下……AFPが元の写真画像 (<https://www.rfa.org/english/news/myanmar/myanmar-government-orders-state-media-not-to-use-rohingya-06212016155743.html>)

2. 実態はどうか？

——報道をもとに詳細なタイムラインで検証

それでは、本当のところはどうか。バングラデシュの新聞報道のなかから、私が気付いた限りで集めた関連記事の一部を、資料(タイムライン②)に提示してみました。

まず事実です。2016年10月9日の襲撃についてですが、その襲撃は言われているよりかはるかに大規模です。350名から400名ぐらいが組織だって攻撃しています。これは軍の規模でいえば大隊に相当します。その規模の人数が、サブマシンガンや突撃ライフル、アサルト・ライフル、爆弾まで使い、バングラデシュ側から越境攻撃していたのです。その結果、ミャンマー側の国境警備隊員9名が殺害され、50挺前後の銃器(51挺や48挺などと言われていて具体的な数は不明)と弾薬1万発以上が強奪されました。

バングラデシュとミャンマーとの関係に限らず、世界の国民国家の常識に照らせば、国境を侵犯して軍事攻撃を加えられたら、おそらくいかなる国もそれに対して反撃すると思います。隣国に侵犯し攻撃を行った人たちがミャンマーのマウンドー周辺の村々に逃げ込んだため、ミャンマー政府は当然のことながら、その人たちに対する掃討作戦を行うことになったわけです。こうした事柄は、報道ではほとんど触れられていません。しかしこうした事柄をまったく無視することはできないのではないかと思います。

報道でほとんど触れられていない事柄がもう一つあります。掃討作戦がひどくなる前から、じつはバングラデシュ側にはたくさんの人が逃れてきています。逃れる方法ですが、じつは多くが親族などの伝手を使ってバングラデシュ側に入ってきていたのです。ということは、ロヒンギャの人たちにはバングラデシュ側にたくさん親族がいるということです。こういうこともほとんど報道されていません。

バングラデシュ側では当然のことながら、大量の越境者が流入する中で、地元の住民から強い反発が起こっています。なぜかと言うと、生態環境を破壊されて生活が乱されて、物価が高騰して、しかも犯罪が多発しているためです。そういう問題が現地であるのですが、そのことも外部ではほとんど報道されません。

こうした中でバングラデシュ政府は、意外なくらい穏健な対応をしています。穏便にという感じです。これは一つには、きちんと報道されていない部分ですが、以下のような事情があるためだと思います。先ほど

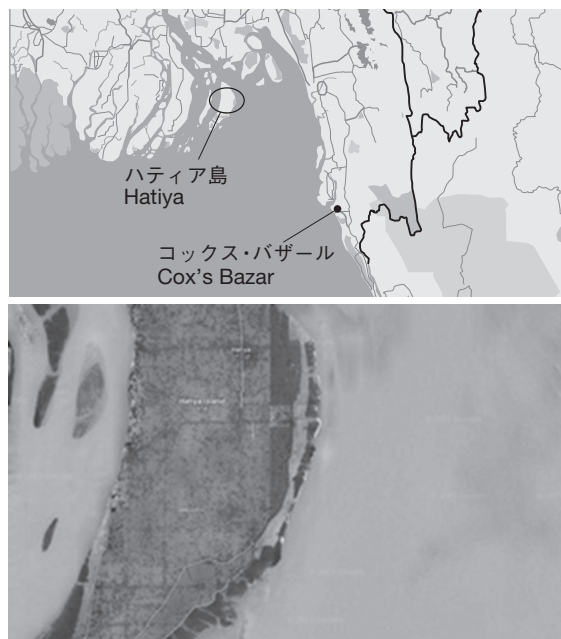


図3-5 ロヒンギャ・キャンプ移転計画、ハティヤ島東部の無人島へ

出典: (<https://bdnews24.com/bangladesh/2015/05/28/bangladesh-relocating-rohingya-camps-from-coxs-bazaar-to-a-shoal-at-hatia-in-noakhali>)

言ったように2016年10月9日の襲撃では、バングラデシュ側からミャンマー側に越境攻撃をしてしまった。しかもバングラデシュ政府は襲撃を防げなかったところか、その企てに気がつかず、襲撃が起こってしまった。本来ならばバングラデシュは、ミャンマー政府・軍から反撃を受けてもおかしくないはずですが、ミャンマー側はそれはしていません。バングラデシュはミャンマーに対して明らかに借りがあるんですね。

それから非常におもしろいのは、最初にロヒンギャの大規模な人口流入が起こったのは1978年であるので、じつはロヒンギャの流入が始まってからすでにほぼ40年近く経つのですが、突然ここに来て、バングラデシュ政府がロヒンギャの一部をコックス・バザールからハティヤ島の砂州に移住させる計画を発表したことです(図3-5)。しかもそれは一時の思いつきではないようで、政府関係者が海外でもそのことを公表しています。このことはもしかすると、バングラデシュ政府がこれまで動いてこなかった基本政策を変化させる兆しかもしれません。

その移住計画を出してきた理由というのが、じつはこの地域がバングラデシュのなかで重要な観光地であって、観光地のイメージをこれ以上は下げたくないということがどうもあるみたいです。

他方で、ロヒンギャの人たちも言われているほど一方的に受け身というわけではなくて、先ほど言ったよ



図3-6 バングラデシュ国境警備隊員と交渉する
ロヒンギャ男性

出典: The Independent 紙 (<http://www.theindependentbd.com/arcprint/details/69632/2016-11-24>)

うに、自分たちで親族の伝手を辿って行ったり来たりしていますし、「女・子どもばかりが残っているから男性が虐殺されている」と言っていますが、そんな単純な話ではないんです。

図3-6は、バングラデシュ領内に侵入し、バングラデシュの国境警備隊の人たちに誰何されているロヒンギャの人たちを写した写真です。ご覧の通り、男性が交渉していますね。ロヒンギャの人たちはバングラデシュのムスリム以上に敬虔なイスラム教徒ですので、女性たちだけで送り出すなどということはしません。男性がきちんとエスコートしてきて、バングラデシュの国境警備隊員なんかと交渉して、女性たちをバングラデシュ領内に入れてもらっているわけです。

では男性たちはどこに行ったのかというと、家に帰ったんです。なぜかと言うと、自分たちが不在のあいだに家・屋敷や家財がどうなるか不安ですから。これはバングラデシュでの災害のときにムスリムの男性がするのとまったく同じ行動です。

それから、バングラデシュ領内に流入するロヒンギャは、本当にどうしようもなく逃れてきている人ばかりではない。というのは、バングラデシュ領内にいるロヒンギャの人たちをハティア島に移住させるというバングラデシュ政府の計画を聞いて、バングラデシュ側から今度はミャンマー側、ラカイン州に5,000人ぐらい帰ってしまいました。ようするに、全部ではないですけども、帰れるわけです。

それから、そのあと2017年に入ってから報道ですが、バングラデシュ側からミャンマーに治療に行っていて帰ってきた人たちが、ミャンマー側で運悪く捕まってしまったという報道がありました。このように今回の事件が起こったあとでも、ロヒンギャの人たちは、バングラデシュとミャンマーとのあいだをけっこう行ったり来たりしています。

このようなことをいろいろ考えて細かく検証してみますと、各アクターがいろいろな立場から判断して行動した結果の累積が、現在の状態になっているとしか言えないのではないかと思います。

もちろん、ミャンマー軍がロヒンギャに対して一定の迫害をしていることは、ほぼ事実だと私も思います。ただし、単純に誰かが加害者で誰かが被害者という図式には、なかなかならないという気がします。

3. Ansar キャンプ²⁾ 襲撃事件のタイムライン

次のタイムライン(タイムライン③)からは、まったく関係のない事件のように見えたものが、関係があったということがわかります。

2016年にバングラデシュで、ロヒンギャの難民キャンプのそばにある警備組織Ansarが襲撃されて、武器・弾薬が奪われた事件がありました。奪われた武器・弾薬の行方がずっと不明だったのですが、最近になって事件の関係者たちがバングラデシュ側のクトゥパランで捕まって、その証言から、奪われた武器・弾薬の一部がクトゥパランの森の中から見つかりました(図3-7)。また彼らの証言から、じつは彼らが全部ロヒンギャの人たちで、この奪った武器・弾薬を使って襲撃事件の一部の武器・弾薬にしたこともわかっています。

これはバングラデシュ側にとっては非常にまずいんですね。言うまでもなく、バングラデシュ国内の武器・弾薬が、ミャンマー側に対する襲撃に使われてしまったことは公表できない。他方でロヒンギャの人たちにとっても、このような事件を起こしたのがロヒンギャの人たちで、ミャンマー側に対してそれを使ったとなると、自分たちが基本的に被害者というイメージだったのがまったく違ってしまっているのであまり都合が良くない。これらいろいろな事情が働いたのでしょうけれども、この襲撃事件に関する報道はバングラデシュでも極力抑えられています。しかし、ロヒンギャと武装や犯罪行為との関係は、このように否定できない形で実際はあるということです。

4. 信仰運動(HaY)、これまでと大きく違う点

もう一つ、信仰運動(Harakah al-Yaqin: HaY)というイスラム過激組織は、一部のロヒンギャの人たちを中心に始まったとも言われています。このHaYという

2) Ansarは、バングラデシュの準軍事組織で、軍以外で唯一正式に武装を認められている。Ansarキャンプは、ここではロヒンギャの居住地のすぐそばに置かれたAnsarの警備・監視活動拠点のこと。



図3-7 Ansarキャンプ襲撃事件関連の写真

左上……ANSARキャンプ襲撃直後、強奪された武器等の搜索の様子(出典: *The Daily Star*, May 14, 2016)。逮捕されたAnsarキャンプ襲撃犯(出典: *Dhaka Tribune*, January 10, 2017)、発見された強奪された武器弾薬の一部(同)、隠匿されていた武器を掘り出したところ(同)

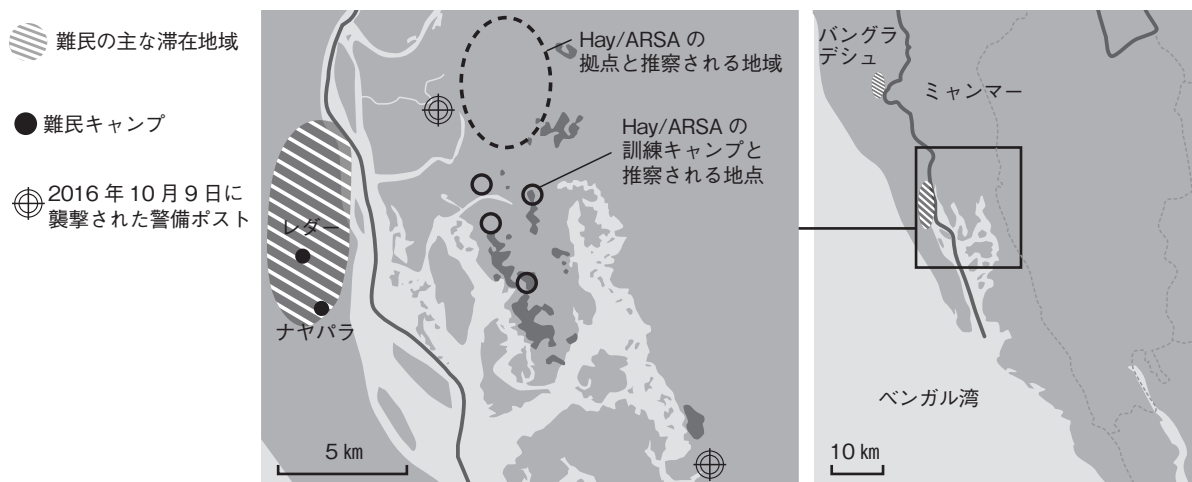


図3-8 HaY(後にArakan Rohingya Salvation Army: ARSAに改称)が襲撃した地域と軍の掃討作戦地域の関係

出典: Reuters 10/03/2017(<http://in.reuters.com/article/uk-myanmar-rohingya-attackers-insight-idINKBN16G36U>)

組織は、2017年にアラカン・ロヒンギヤ救済軍(Arakan Rohingya Salvation Army: ARSA)に改称しています。彼らがいる場所は、図3-8の点線で囲ったあたりで、ミャンマー側の山のなかに訓練キャンプを置いているようです。図中の十字に二重丸の印が、2016年10月9日に襲撃された地点です。左の方の斜線で記された地域がバングラデシュの難民キャンプの一部です。HaYおよびARSAの背後にパキスタンにいる亡命ロヒンギヤの人たちがいて、アフガン系の組織がそれに関わっているとも言われています。資金が中東から来ていることは、ほぼ確定しています。

5. 大量の薬物の摘発

もう1点、これは最後まで話をしようかどうしようかずっと迷っていたのですが、することにしました。最近バングラデシュ国内で、ヤーバー(Yaba)と呼ばれる薬物が大量に発見されています(図3-9)。これはメタアンフェタミン、つまり覚せい剤と似たような薬物です。資料(タイムライン⑤)で示した通り、ものすごく大量に発見されています。この資料で示しているのは最近の主な事件だけで、ごく一部です。しばしば何十万錠の単位で見つかっています。

この資料で示した記事には、「ミャンマー人ムスリム」がヤーバーの密輸に関わっているという記述が非常に多くみられます。こうした薬物の密輸に、じつは

ロヒンギャの人たち、すくなくともその一部が間違いなく絡んでいます。

ロヒンギャ関連は、バングラデシュでも政治的に極めて微妙なため、バングラデシュ国内の報道において様々な婉曲表現が使われます。これはバングラデシュの国内政治の報道に関しても同様です。しかし、ジャーナリストや知識人などバングラデシュの報道に通じている人が読めば、すぐに何を意味しているのか分かる、というパターンがあります。斎藤さんの報告にあったとおり、ミャンマーのムスリムの内実は多様ですが、バングラデシュの報道においてミャンマーとの国境地域に関する記事の中で「ミャンマー人ムスリム」と書かれている場合、バングラデシュの人たちはこれをロヒンギャであると理解します。私自身も、この地域で「ミャンマー人ムスリム」はロヒンギャ以外にありえないと思います。3月2日の報道に、ミャンマー側からナフ川を渡ってバングラデシュ側に入った人たちが言及されていますが、この時期にナフ川をわざわざ渡ってバングラデシュ側に来るのも、地理的に言ってロヒンギャ以外ありえないと思います。

1月22日の報道では、マウンドー周辺に38のヤーバー製造工場があると伝えられています。「マウンドー周辺」と地理的に限定されていることを、バングラデシュの人たちは、ロヒンギャと重ね合わせて読みます。こうした中でバングラデシュには、ロヒンギャ問題がヤーバー密輸問題と表裏一体なのではという推察もあり、私もおおむねそのような見方をしています。

6. バングラデシュ国内での主要社会問題

——ミリタント(イスラーム過激武装組織)と薬物(とくにヤーバー)

もう一つは、バングラデシュ側の事情があります。バングラデシュ側の事情として、昨年日本人7名も犠牲になったイスラーム過激派組織の問題があって、国内でいま徹底的にそれを叩こうとしています。毎日のように事件が起こっていて、すくなくともこれまでに70名近くが殺害または自爆というかたちで、この何か月かで死んでいます。それぐらい大きな問題でして、いまバングラデシュでは大きな社会問題となっています。

バングラデシュの二大社会問題の一つがイスラーム武装勢力の問題で、もう一つが薬物、とくにヤーバーの問題です。そうすると、ロヒンギャの問題は、これははっきり言う人はいないのですが、このバングラデシュ最大の社会問題二つのどちらにも絡んでいるのです。こ



図3-9 Yaba45万錠押収、
バングラデシュ人と「ミャンマー市民」

出典: Daily Asian Age, 12 Feb. 2017 (<https://dailyasianage.com/news/48111/45-lakh-yaba-seized-9-held-including-5-myanmarrese>)

れは非常に重大な事態でして、バングラデシュ側としても、これを見過ごしにはできないわけです。

II. バングラデシュにとっての「ロヒンギャ問題」

バングラデシュの人びとの

ロヒンギャ問題に対する受け止め方

このようなことがバングラデシュでは大きな問題としてありますが、ところがバングラデシュ国内の事情を考えると、ロヒンギャの人たちが集中しているのは、先ほどから見てるように国境のごく一部の場所です。ほんのわずかの一帯に流れ込んでいる。数から言うと、いろいろな説がありますが、これまでの累積で30万人ぐらいです。それからそこにまた新しく7、8万人流れ込みましたけれども、バングラデシュの人口は、いま1億5,000万人を超えています。しかも、バングラデシュではこの何か月かだけで、何万人にも影響がおよぶような事件や災害などがいくつも起こっています。それからくらべると、ロヒンギャ問題はごく小さな地域問題にすぎないんです。

したがって、ロヒンギャの人たちが大きな事件を起こすとか、国内の他のところにドッと流れ出すとかいうことが起これば別ですが、国境地帯のごく一部のところに止まっている限りは、バングラデシュ側としては、政府にとっても一般の人にとっても辺境の話で、すし、小さな問題にすぎないんです。そのあたりのことも、バングラデシュ政府が今回の問題に大騒ぎしない、ある意味穏便にすましてしまっている背景にあるのではないかと思います。

細かいことはいろいろありますが、言い出すときりがないので、これぐらいでやめておきます。

資料

■タイムライン① 2016年事件の一般的に知られているタイムライン

- 2016年10月9日にミャンマー国境警備隊が襲撃された。
- ミャンマー軍等がマウンドー周辺のロヒンギャの村に襲撃開始。すぐに襲撃が大規模化、かつ、暴力的なものとなった。多数の男性が殺害され、または、拘束された。拘束されたロヒンギャ男性たちに対して軍が激しい暴行を加えた。また女性に対する性的な暴行も発生。いくつかの村は焼き討ちにあって消失。
- ミャンマー軍等の暴力を逃れるために、10月半ばからロヒンギャがバングラデシュ側に越境・流入し始める。
- ミャンマー軍の暴力が収まらず、そのためロヒンギャのバングラデシュ側への流入が大規模化。約1か月後辺りから、徐々に国際的な関心を集め始める。
- 2016年末までに、約7万人程度と言われる多数が流入。
- 2017年に入って、ロヒンギャのバングラデシュ流入者の窮状を伝えるレポートが登場する。また、流入した人々たちの一部に取材して、ミャンマー軍の暴力行為を訴えるレポートも登場。
- バングラデシュ政府は流入したロヒンギャを国内の別の土地に移住させる計画を発表。
- 大きなニュースになる事態は収まったが、約7万人がバングラデシュ側に滞留したまま、事態は膠着状態。

■タイムライン② 詳細

※明記しない限りバングラデシュでの情報。主語・主体も基本的にバングラデシュ(政府・人)。

10月10日報道	10月9日未明(深夜1:30頃) マウンドー近くの警察の国境警備ポスト1カ所が武装した90名ほどのロヒンギャらしい男たちに襲撃される。連続的に別の3カ所も襲撃され、警官合計9名が死亡。他方、襲撃側の死者も8名が死亡、2名が捕まる(後に、計350ー400名による大規模な襲撃と判明。武器も、山刀や等だけでなく、サブ・マシンガンや突撃ライフル等まで含む火器と多数の爆弾を使用した「攻撃」と判明)。 襲撃側は武器(種類不明)51丁、弾薬1万発以上を強奪した。当局は、当初ロヒンギャ連帯組織(Rohingya Solidarity Organisation:RSO、以前からある武装闘争組織)の仕業と疑う。ミャンマー側は警察と軍隊を出動し、犯人たちが逃げ込んだ村の搜索と犯人追及開始。犯人が多数で、分散して襲撃・逃走したことから、主にマウンドー北部の多数の村が搜索・追討作戦の対象となった(らしい)。
10月11日報道	搜索で犯人4名射殺。また、先に捕まえた2名から自供を引き出した、とも。
10月12日報道	その後の衝突でビルマ軍兵士5名が殺害される。搜索、さらに徹底。そのため、マウンドーの全400校の学校全て一時閉鎖。
10月16日報道	拘束された襲撃犯の自供から、新組織Aqa Mul Mujahidin(正式名称も実態も不詳、のちに信仰運動(Harakah al-Yaqin:HaY)に改称し、さらにその後アラカン・ロヒンギャ救済軍[Arakan Rohingya Salvation Army:ARSA]に改称)の犯行らしい、と。
同日 Bangkok Post 報道	警備当局(軍、警察)は、これまでに29名殺害。Aqa Mul Mujahidinは、中東から資金を得て、最大400名を組織し、トレーニング。
10月22日 Bangkok Post 報道	ネット上に投稿されたビデオで、ロヒンギャ語を話す男が犯行を認めた、と。他方、搜索による死者は、ミャンマー側が報じた数よりも多く、優に30名を超える、と人権団体の主張。
10月24日 The Irrawaddy 報道	マウンドー南部に逃れていた人々が戻り始めた、と。
11月2日報道	(事件前には)「1日(入国)パス」を使ってロヒンギャ武装勢力(HUJI-A等)メンバーがバングラデシュに入国。商人等を偽装し。入国パスは国境の税関が出す。バングラデシュ国境警備隊(Border Guards Bangladesh: BGB)はパスを持っていたら(明確な容疑等がない限り)入国許可せざるを得ない。BGBは、この点に関し内務省に取り扱い厳格化を要請するレターを出した。
11月12日 Human Rights Watch 発表	衛星画像解析により3つの村で軍等による430戸焼き討ち確認。襲撃を受けた直後から、軍は同地域を「作戦ゾーン」と宣言し、搜索開始。地元の人の移動も制限し、外出禁止令。ところが、その最中の11月3日に第2回目の襲撃事件発生。警官1名死亡。搜索「作戦」さらに激化へ。
11月14日 The Irrawaddy 報道	11月12日に武装勢力約60名が襲撃(第3回目)。それに対し軍が激しく反撃、追跡し、13日には武装勢力の少なくとも20名以上を殺害。双方で合計27名以上の死者発生。
11月18日 The Irrawaddy 報道	拘束された武装勢力側の人間が、外国のムスリム過激派が軍事訓練を自分たちに強要していた、と自供。襲撃を行えばバングラデシュ側からすぐに加勢が来ると、イマームがモスクで煽った、とも。同時に、17日までに公表されているだけで、事件後に合計302名拘束、双方の死者は合計69名。

11月21日報道	バングラデシュ側でロヒンギャ流入急増。国連の推計では3万人が自宅からの避難を余儀なくされている、とも。(一部はバングラデシュ側へ、一部はラカイン州内の周辺地域へ)。(BGBは、この前までは、明らかに流入者に目を瞑っている様子だったが)BGBも海洋警備隊も警戒強化。
11月23日報道	ロヒンギャの流入が心配のタネに。(高田注:この前後から、問題視する報道急増)
11月25日報道	親族の伝手をたどって続々と流入。仲介業者も暗躍。
11月26日報道	避難してきた老女の話。ミャンマー政府は彼女たちに市民権を認めていなかったが、生活自体は良かった。しかし、今回の事件で全て一転。全て捨てて逃げるしかなかった。
同日、ベンガル語紙報道(1面トップ)	スーチー氏の主導で対応チームが設立された(設立は2週間ほど前)。
11月27日報道	ロヒンギャがテクナフ、ウキヤ周辺だけでなく、コックス・バザール、さらに一部はチッタゴン方面にまで移動し始めている。
12月3日、 <i>The Sun Daily</i> (Malaysia) 報道	マレーシアのナジブ首相が、ミャンマー軍による「民族浄化」だ、とミャンマー軍と政府を名指しで激しく非難。
同日報道	スーチー氏が滞在中のシンガポールで、国際社会が過剰に反応しないよう要請。元はと言えば、武装勢力が襲撃を行ったことに対し軍が反撃したことがきっかけだったとの事実を忘れないように、とも。
同日報道	ハシナ首相が、10月9日の襲撃がきっかけになって今回の問題が生じた、と襲撃犯に原因があることを指摘。バングラデシュ側は武装勢力に隠れ家を提供しない、みつけたら捕らえてミャンマー側に引き渡す、と。
12月4日報道	(テクナフ等の)地元住民が不満。流入した難民がシェルターを作るために木や竹を切り、土地を切り開き、山を丸坊主にしていくだけでなく、仕事を探して出てくるため、地元の経済・社会は大混乱。
12月5日 <i>The Irrawaddy</i> 論説	今回のロヒンギャ問題に対するマレーシアの非難を、マレーシア国内問題(ナジブ批判、ナジブ下し)から目を逸らせるための小細工として批判。
12月6日 <i>The Irrawaddy</i> 報道	ミャンマーのムスリム組織がマレーシアの介入批判。宗教対立ではなく、あくまでも民族問題、とも。
12月13日 <i>TIME</i> 報道	最新のムスリムの反乱がビルマで生じている、とする報道。同記事の筆者はInternational Crisis Groupメンバー。ラカイン州のムスリムの状況は、これまでと質が違うものになりつつある、と。実行犯たちはHaYを名乗る。2012年の仏教徒との衝突事件の後に設立。最近バングラデシュ側から何百人かがラカイン州に越境して同組織に加入。メッカにいる亡命ロヒンギャたちが監督。スポークスマンはカラチ生まれでメッカ育ちのアタウッラー (Ataullah Jununi)。
12月23日 <i>The Irrawaddy</i> 報道	政府主催の報道グループによるマウンドーでの現地調査の際、インタビューに答えたロヒンギャ男性、首をはねられて殺害されているのが見つかる。
12月27日 <i>The Irrawaddy</i> 報道	(ミャンマー)軍指名の副大統領が「過去のコミューナルな対立とは異なり、今回の事件は主権の侵害だ」と主張。
2017年1月5日 <i>The Irrawaddy</i> 報道	ミャンマー政府が中間調査報告書を出した。他方、その間にも今度はマウンドーではなく、近隣の都市で新たに4人の武装組織メンバーが14丁の密造銃と共に逮捕される。
1月6日 <i>The Irrawaddy</i> 報道	マレーシアでインドネシア人テロ容疑者逮捕。ラカインに向かいテロ計画。
1月10日報道	ウキヤで、地元の郡議会メンバーの差配でロヒンギャ50-60世帯に1人のリーダーが置かれ、その指導の下で森林局の保有林を大々的に開墾。
同日、別の報道	HaYが一連の事件を実行したことを認め、最後まで戦うと宣言。
1月13日報道	ロヒンギャ女性たちがミャンマー軍等からレイプ被害に会っているとするロヒンギャ側の一部の主張。ただし、記者は個人的には真偽を確認できなかった、とも。
同日 <i>The Irrawaddy</i> 報道	ロヒンギャ問題を議論するためダッカを訪問したミャンマーの副外務大臣が、「Burma nationals (高田注:この場合は「ビルマ国民」とほぼ同意)と確認された人は」帰還させる、とする。
1月15日報道	バングラデシュ側へ送られた親書の中で、スーチー氏が「ロヒンギャ」とは言及せずに、以下の条件提示。「10月9日の警察の派出所への襲撃の後、ミャンマーから逃げたと証明された人々を特定し、帰還させる協議を始める」。
1月17日報道	コックス・バザール市内でロヒンギャ2人がパイプ爆弾78個を所持しているところを捕まる。(高田注:「ミャンマー市民」と記し、極力「ロヒンギャ」とは言わない。「被害者」像が崩れることを警戒?)
1月27日報道	フィールド・レベルの警官はロヒンギャに目を光らせるように、と警察総監が指示。ロヒンギャを決められた地域から外に出すな、とも。

1月28日 ベンガル語紙報道	10月9日の襲撃では、別の国境警備隊ポスト2カ所も襲う予定だったが、途中のトラブルで諦めた、と。サウジアラビア在住のアユブ・ガジ (Ayub Gazi) を始め、各国に散らばったロヒンギャ武装グループのリーダーたち、計10名の指示で実行グループが襲撃を実行。ミャンマーから迫害されたロヒンギャがバングラデシュに逃げてくれば、武装勢力に非常に利益になる。彼らはこのところ(難民)支援を実施する名目等で(海外の)資金拠出団体から資金を得て利益を上げている。 コックス・バザールでパイプ爆弾と共に2名が逮捕された件で、2人の救出のため、金曜日(2017年1月27日)夜、テログループHaYのリーダーたちの間で秘密集会が開かれた。
1月29日報道	「正規の書類を保持しないミャンマー国民」(＝実質的にロヒンギャのこと)をハティア島東方の無人のテンガルチョールに移住させる計画をネット上で1月26日付官報により公表。
1月31日報道	アウンサンスーチーからロヒンギャ問題で特命を受けたアナン(元国連総長)の率いる委員会のメンバー3名が難民キャンプを視察。報告書は8月にまとめられる予定。コックス・バザールの県知事とも会見。
2月1日報道	バングラデシュの外務大臣、ミャンマーが彼らの帰還を認めるまでの間(一時的に)、移住させる。「正規の書類を保持しない」ロヒンギャを「難民」認定するつもりはない、と主張。
2月4日 The Irrawaddy 報道	国民民主連盟のアドバイザーでムスリムの法律家ウー・コーニー(ヤンゴンで1月29日に暗殺)の死後、アウンサンスーチー、沈黙を保つだけでなく、家族に弔問の使いさえ送らない。意図を疑問視する報道。ちなみにコーニーは、憲法の改正について法的な検討・アドバイスをしていた(高田注:ミャンマーの複数のジャーナリストは、ロヒンギャ問題と密接な関連があるのではと推論)。
2月8日 ロイター報道	複数の国連関係者が、それぞれ別の難民に聞き取り調査をした結果、ミャンマー軍の掃討作戦により恐らくは千人単位で殺害されている、と記者に発言。匿名で。実際は確認困難。
2月11日報道	ハシナ首相の側近、移住候補先へ行き、船着き場とヘリパッド建設指揮。
2月12日報道	与党アワミ連盟の幹事長、移住計画推進表明。「観光地」であることを考えるとやむを得ない、と。
2月13日報道	ロヒンギャの難民たち、特に女性と子供、老人がキャンプ周辺からコックス・バザール方面まで、主要道脇に出てきて集団で終日物乞いする姿が目立つ(国際法では「難民」は指定された地域外に出るのは禁止)。
2月14日 The Irrawaddy 報道	捕まっていた国境ポスト襲撃犯のうち1名に、襲撃グループを手引きしたとして死刑判決。供述では、襲撃を3カ月かけて計画した、と。現在拘束中なのは約500名。
2月15日報道 (長文記事)	ミャンマー独立前後に遡り、ムジャヒディン運動、1978年のビルマ軍による軍事作戦と最初の難民流入、1994年のバングラデシュ側からミャンマー側への越境、爆弾攻撃。結局、地元の支援なく敗退。1996～97年には当時のイスラーム軍事組織聖戦士の集まり(Jamaat-ul-Mujahideen: JMB)創設者がRSOと協議し、協力を確認。それを基に、RSOはJMBのメンバーに武器と爆薬のトレーニング。RSOはチッタゴン丘陵地帯南部で2013年と2014年にミャンマーの武装警察と交戦。同グループは麻薬と他の物品の密輸に関与、等の記述。
同日報道	マレーシアから現地イスラーム系NGO等の救援物資1472トン以上が船で到着。
2月17日 ロイター報道の引用	軍はラカイン州での軍事作戦終了。外出禁止令も緩和。新たに任命されたセキュリティ・アドバイザーが、国家顧問(アウンサンスーチー)事務所が2月15日に出した見解を引用して発言。
同日 The Irrawaddy 報道	ラカイン州政府、マウンドー郊外に国境貿易区整備促進、早期完成へ。状況が安定したため、国境貿易は12月24日に再開された。マウンドー北部(最も軍事作戦の激しかった地域)のムスリムたちも今では車で市の中心部に来ている、とも。
2月22日報道	国連特使、2日連続でキャンプを視察。(3月10日報道:BBCで「人道に対する罪」と表現)
2月24日 The Irrawaddy 報道	10月9日当時のミャンマー側国境警備担当現場責任者、警察法廷で有罪確定
2月25日 The Irrawaddy 報道	実際に現地では平穏化している、との情報。ただし、軍の報道官は、「軍事作戦を終了するつもりはないし、そんな(軍の作戦終了という)報道があったとは気づかなかった」と発言。
2月28日報道	バングラデシュ側でロヒンギャ・センサス開始(コックス・バザール、チッタゴン、チッタゴン丘陵地帯南部で)。
同日 Reuters 報道	(人権侵害があったとのレポートに)ミャンマー軍が反論。軍独自に調査したが、そのような証拠は得られない。今回の行動は「合法的な対ゲリラ活動への作戦」であり、「国を守るためには必要だ」と。
3月1日報道	中東の「イスラーム国」がバングラデシュのジハーディストに対し、ロヒンギャのために戦え、と促す。
3月2日報道	バングラデシュのアウトドア活動組織がコックス・バザールの観光プロモーションのため、3日間に渡る100kmウォーク(＝世界一の砂浜縦断)を開催すると発表。観光大臣は「賞賛すべきイニシアチブだ」と。

3月3日報道	ロヒンギャが国有林の社会植林地を不法占拠し、違法開拓、集落設立。
3月6日 The Irrawaddy報道	バングラデシュ側に治療と労働(4ヵ月間)に行っていたミャンマー側の国内避難民28人(内、子供5人)が、船で戻る途中、ミャンマー側への違法侵入容疑で捕まる。ロヒンギャと記さず。
3月8日報道	テンガルチョールへの移転を恐れて、すでに5000人のロヒンギャが帰った(ロヒンギャのリーダーの証言)。国境警備隊側は、届けを受けて戻ったのは先月と今月現在時点で300名弱、とする。
3月10日 Reuters(India)報道	現地の若者の証言＝2016年の初め頃に声をかけられ、応じた者がいる。HaYらしき連中はあちこち移動し、各地で5～10日程度のトレーニングを施す。教官はウルドゥー話者。

■タイムライン③ Ansar キャンプ襲撃関連

2016年5月14日 報道	13日早朝(深夜)、ロヒンギャ避難民居住地でAnsarの派出所が襲撃され、武器弾薬(M2ライフル4丁、サブ・マシンガン2丁、中国製ライフル5丁、銃弾670発)が強奪される。25～30人による組織的な犯行。地元AL有力者の発言では、RSOの可能性もある。キャンプには壁も仕切りもない。キャンプには1万9,000人暮らす。地元住民の話＝ミャンマー側からしばしば親戚が来て泊まる。
12月12日 The Irrawaddy報道	ミャンマー当局がアラカン解放党(Arakan Liberation Party、ラカイン仏教徒の側の反政府組織、その武装部門はアラカン解放軍(Arakan Liberation Army))の武器輸送を摘発。逮捕された3名の自供＝ムスリム側(＝ロヒンギャ武装勢力)が最近急激に武装を強化しているから、こちらも対抗上、強化せざるを得ない、と。
2017年1月10日報道	Ansar キャンプ襲撃犯と見られる2名逮捕。ウキヤのクトウパロンで(キャンプ内か外か不明)。
2017年1月11日報道	2名の供述で、山中に埋められていた盗まれた銃と弾薬の一部が発見される。武器弾薬は大幅に減っていた(銃6丁と弾薬481発がない)。同事件関連で別のロヒンギャ3名逮捕。
同日、別の報道	捕まった3名が、盗んだ武器が10月9日の襲撃の際に使われたことを認める。10月9日の襲撃後も11回にわたって攻撃を仕掛けミャンマー側警官・軍人7名を殺した、と自供。未発見の武器は捕まっていない仲間が持っている、とも。
2017年1月12日報道	訪問中のミャンマー外務副大臣に対し、ハシナ首相が「テロリストに対しては『ゼロ・トレランス』の姿勢で臨む」と明言。「バングラデシュは、いかなる武装反乱集団にも、近隣[諸国]に対して国土を使うことは許さない」とも発言。
2月17日、論説報道	ロヒンギャの武装組織、さらに攻撃の可能性も。南アジアや中東の武装組織や原理主義グループと関連した動きに大まかに言及。ムスリム組織はモスク、マドラサ、イスラームの集会でロヒンギャ救援(名目)の募金呼びかけ実施。
3月1日報道	さらに武器6丁(サブ・マシンガン等を含む)が見つかる。Ansar キャンプ襲撃犯の1人を捕え、自供に基づき、発見。

■タイムライン④ HaY関連

2017年1月17日 ベンガル語紙の報道 (非常に長文のレポート)	HaYは、2012年のラカイン仏教徒との衝突の後、RSOを始めとする既存武装組織複数のメンバーの一部が武器に習熟し、外国でトレーニングを受け同年に結成した。ラカイン州の山中にいくつもの隠れ家を持つ。バングラデシュ側にいる20名ほどのメンバーが海外からの武器や資金調達を行い、ミャンマー側へ供給。あるモウロビの銀行口座に外国から6.7億タカが送られて来た。2016年10月9日の襲撃の5・6ヵ月前に、アタウッラーをリーダーとする武装トレーニングを受けた10人ほどが、北部マウンドー近辺に姿を現す。周辺の各村で自治について周知がなされ、賛同した若者たちを丘陵地帯に連れて行ってゲリラ戦のトレーニング(高田注: 定期的にAnsar キャンプ襲撃とも符合)。
同1月22日 ベンガル語紙報道 (上記レポートの続報)	HaY、多量の武器弾薬を集める。あるモウロビの銀行口座から、6.7億タカの支出がなされた。外国からの多額資金流入を捜査当局は重視、イスラミ銀行(Islami Bank)等いくつかの口座から、この資金は貸借の形で流入。ショフィク(Safiq)は支援者回りのため、チッタゴン丘陵南部、チッタゴン、ダッカ等に行き来。Ansar Camp 襲撃で盗まれ山から発見された武器もコックス・バザールの町で押収されたパイプ爆弾も、HaYのためものだ、と国境警備関係者。HaYは、ラカイン州の山中にいくつもの隠れ家を持つ。バングラデシュ側にいる20名ほどのメンバーが海外からの武器や資金調達を行い、ミャンマー側へ供給。ある原理主義政党の庇護で多数ロヒンギャ戦士がバングラデシュ側に渡ってきていて、理由は2つ＝①武器を持っていることで重用される。②多額の外国資金が流れこみ、それを私的利用可能。一部ロヒンギャの大物たちは金持になっている。
2月17日報道	「ロヒンギャ・テロリストへのより広範な支援はさらなる攻撃を示唆?」との題で。

2月20日報道	4か月の掃討作戦で、武装勢力側69人が死亡。ミャンマー軍に585人が拘束され、39人が「殺人、公共物破壊、違法組織との交流」で裁判を受けている。他方、ミャンマー政府側では、警官10名、兵士7名、文民13名の合計30人が死亡。襲撃では、各種銃器48丁、弾丸6624発、銃剣47本、(銃弾の)マガジン164本が奪われた、と政府側は発表。 別のHaYへの直接取材で、襲撃後、HaYは地域と国際的なイスラーム武装勢力から多大な支持を得たが、一般のロヒンギャの人々からは支持を失い、一時撤退せざるを得なくなった、と認めた、とも。
3月10日 Reuters (India) 報道	現地の若者の証言＝2016年の初め頃に声をかけられ、応じた者がいる。HaYらしき連中はあちこち移動し、各地で5～10日程度のトレーニングを施す。教官はウルドゥー語話者。

■タイムライン⑤ ヤーバー(メタアンフェタミン、錠剤タイプの覚せい剤の一種)関連

2016年10月7日報道	チッタゴン港沖で、バングラデシュ人とミャンマー人ムスリム(高田注:ロヒンギャ?)、漁民に偽装して麻薬を持ち込もうとして居るところを捕まる。ヤーバー50万錠、末端価格で2億タカ相当を押収。
10月10日報道	(10月9日事件直後)ミャンマー警察のトップが、9月末の大量のヤーバー摘発が10月9日の襲撃を引き起こした、と推測を述べる。
11月30日報道	バングラデシュ人とミャンマー人ムスリム(高田注:ロヒンギャ?)の一味。トロール漁船からヤーバー70万錠と共に逮捕。これまでに、すでに60万錠も密輸入していたことも認める。
12月6日報道	「ミャンマー・コネクション」のタイトル。ミャンマー軍も武装少数民族組織側も、直接、ヤーバー取引を庇護している。ルート＝シャン州の少なくとも45ある製造工場が出発点。バングラデシュには、まずヤンゴンへ。次いでシットウエへ。シットウエでは数カ所に分散して保存。そこから徐々にマウンドー経由でテクナフへ、またはポリシャル等へ。さらにその先へ。2016年1月から11月27日までの間に、RAB ²⁾ だけで、700万錠以上押収、テクナフ価格で20億タカ以上(高田注:RABは、1錠＝300タカとして計算。ダッカ等の末端価格は、その倍以上)。 (高田注:ほぼ同時期に、ミャンマー軍はシャン州で少数民族側武装組織に対して激しい攻撃を継続的に実施。攻撃の規模は遥かに大きく、中国側に越境した難民も、最初に万単位で、途中からさらに2万人。 →東西両面でヤーバーコネクション潰し、という同じ目的からの2正面作戦?)
2017年1月22日報道	バングラデシュとミャンマー双方の麻薬取締当局担当者が2月にヤーバー取り締まりに関して会談予定。マウンドー周辺に38のヤーバー製造工場がある。
1月25日 ベンガル語紙報道	ハシナ首相が学生連盟(与党アワミ連盟の学生組織)の大会で、武装勢力と麻薬、の2点を挙げ、世論形成とそれらに対し反対することを強く求める。
2月6日 The Irrawaddy 報道	ラカイン州で僧がヤーバーを運んでいて捕まり、さらに僧院からも。ヤーバーを合計460万錠摘発。
2月10日報道	ヤーバー80万錠摘発。厳戒態勢を敷いているはずのミャンマー側から入ってくるところを。実行犯はテクナフのムスリム(銃撃で死亡)。一部はラカイン側に泳いで逃走。
2月12日報道	RABがコックス・バザール沖でトローラー船からヤーバー45万錠摘発。船長等ベンガル人3名とロヒンギャらしき5名逮捕。彼らの供述からトローラー所有者を市内の自宅で逮捕し、さらにヤーバー5万錠摘発。
2月19日、ベンガル語紙報道(1面トップ)	「ヤーバー使用者500万(人)」。日に300万錠、9億タカ相当が入り込む。ミャンマーの国境地帯(＝ラカイン州)に37の製造工場。
2月21日 The Irrawaddy 報道	ラカイン州政府大臣が議会答弁で、2016年のヤーバー摘発数が1,800万錠に上ったと報告。上ビルマ地方から流入するヤーバーがラカイン州経由でバングラデシュ側に密輸されている、とも。
2月23日報道	薬物取締局トップの記者会見で、国内に3,100人以上の麻薬密売人がいる、と。最大の問題がヤーバー。3月8～10日にバングラデシュ・ミャンマー両国の関係部局がバングラデシュ・ミャンマー国境のミャンマー側にある工場の問題について話し合う予定。バングラデシュから、同局、BGB、警察、他12名が参加予定。
2月26日報道	警察のトップ、(イスラーム過激)武装組織と麻薬が2大課題、とする。
2月28日 Reuters(India) 報道	初めて本格的にロヒンギャとヤーバーの関係を取り上げたレポート。末端の売人の例しか取り上げず(「他に生計の手段がないから、やむを得ず麻薬密売に手を染めている」との論調)。
3月2日報道	ナフ川の近くで、密輸入されようとしたヤーバー81万錠押収。ミャンマー側から入ってきたところを。犯人たちは捨てて逃走(高田注:ほぼ間違いなくロヒンギャ)。

1) RABは特殊警察組織である緊急行動部隊(Rapid Action Battalion)の略称。RAB 2はその第2部隊で、主にコックス・バザール方面を担当。

参考文献

- AHMED, Imtiaz, ed., 2010, *The Plight of the Stateless Rohingyas: Responses of the state, society & the international community*, The University Press Ltd., Dhaka.
- BHATTACHARYA, Swapna, 2015, *The Rakhine State (Arakan) of Myanmar : interrogating history, culture and conflict*, Manohar, New Delhi.
- CHARNEY, Michael W., 1999, *Where Jambudipa and Islamdom Converged: Religious Change and the Emergence of Buddhist Communalism in Early Modern Arakan, 15th-19th Centuries*. PhD thesis. University of Michigan.
- エーチャン、(天野瑞枝訳)、2011、「ヤカイン世界」伊東利勝編著『ミャンマー概説』めこん。
- LEIDER, Jacques P., 2016, “Competing Identities and the Hybridized History of Rohingyas,” in Renaud EGRETEAR and François ROBINNE eds., *Metamorphosis: Studies in social and political change in Myanmar*, NUS Press, Singapore.
- 根本敬、2017、「ビルマ、ロヒンギャ問題の憂鬱」『世界』2017年3月号

質疑応答

梓田智子(群馬県立高崎工業高等学校教諭) 貴重な話をありがとうございました。私は昨年度ロヒンギャ関連の修士論文を提出しておりまして、ロヒンギャ問題にはかなり関心がありますので、事実確認を2点させてください。まず、タイムラインのプリントで、10月10日報道の襲撃事件に関して「当初RSOの仕業と疑う」とあるこのRSOは「Rohingya Solidarity Organization」で間違いはないでしょうか。

高田 そうです。

梓田 ありがとうございます。2点目ですが、今度はレジュメのほうです。国境のロヒンギャの人びとが主体的な行動をとっているという点がかなり興味深く感じました。バングラデシュには、先ほど先生のお話にもあったように、クトゥパロンとナヤパラのキャンプがあると思いますが、そこに収容されている人びとは、親族の伝手がなかった、もしくはなんらかの間違いで難民キャンプにたどり着いてしまったという解釈でよろしいのでしょうか。

高田 細かいことまで話ができなかったので大雑把に話したのですが、まずクトゥパロンとナヤパラのキャンプですが、どちらも定員が1万5,000人ぐらいです。その1万5,000人が定員のところに、じつはどちらも3万人ぐらいいるんです。しかしそれでもまだ6万人程度です。これに対してバングラデシュに流入したとされるのは何十万人ともいわれており、それらの人たちを収容するには全然足りないわけです。また準公式キャンプ、先ほど国境のところでお見せしたレダーというキャンプもあります。しかしそこを合わせても、それでギュウギュウに詰め込んでも、収容可能な人数は全部で10万人にも満たないわけです。では残り何十万もの人はどこにいるのかと言うと、それはそれ以外のところにあふれ出して、そこらじゅうにいるわけです。

そこらじゅうにいますので、はっきり言ってどこまでがもともとの地元の住民で、どこまでがロヒンギャの人か、その地域に行ったらほとんどわかりません。外部の人がわからないだけでなく、地元の人でよっぽど古くからいる人以外はわからない。なぜかと言うと、ロヒンギャの流入は1978年から始まっていて、もう40年近くになっていますので、当然、地元で生まれた子どもたちもたくさんいます。ですから、その区別をそもそもできるのかという問題があると思います。

熊田徹 私も細かい報道を見たのですが、そのなかに、バングラデシュの外相がミャンマー側に対して二国間交渉で解決しないかという提案をして、その基礎に国際世論等に基づいた交渉にしようということを出したということが、バングラデシュ側の報道が何かに載っていました。

もう一つは、バングラデシュ側がいろいろ交渉して、ロヒンギャを受け入れる。とりえず受け入れて、どこかに収容しなくてはいかんと。その収容の問題で、ベンガル湾のなかに孤島が、人が住んでいない島があつて、報道によると高潮になると沈没するようなところらしいですが、そこに決めたという話も載っていて私は少々驚いたのですが、この二つの報道記事はどの程度正確か、その他ご感想があればご教授いただければ幸いです。

高田 最初のご質問については、その時々でバングラデシュ側も若干態度を変えていますので明確ではないですが、バングラデシュは基本的に二国間交渉によってロヒンギャ問題を解決しようとしています。場合によっては外部にいろいろと訴えますが、基

本的に二国間交渉での問題解決を試みています。バングラデシュ側は、ベースはミャンマー側との友好関係を維持したい。できるだけ維持するだけではなくて、協力・発展させたい。そっちがベースです。それで、いろいろな二国間関係が他にもありますので、それを話し合うなかで、一部「ロヒンギャの問題もなんとかしたいな」というぐらいです。ですから、ロヒンギャの問題があるから二国間関係がどうこうというような話には、まったくなっていないです。まずその点が大きく誤解されているところだと思います。

2点目は、まさにそのとおりです。先ほど図3-5でお見せしたように、ここにハティアという島があります。このハティア島のすぐ外側に砂州ができています。砂州はいまやや安定しかかっていて、一説によると高いところで2〜3メートルぐらいあるんじゃないかと言われているんですが、言うまでもなくサイクロンがきたら終わりです。

ただし、はっきり言って、じつはバングラデシュの南部のほうの砂州、「チョール」と言いますが、そのチョールはどこでも似たような状態で、しかもそこに人が住んでいるんです。ですから、ロヒンギャだけをそこに無理矢理住まわせると言っているわけでもないんです。なぜかと言うと、実際に地元の人もそこを利用し始めています。それぐらい土地が足りないので、べつにロヒンギャだけに対してむちゃくちゃをしているわけではありません。

ただし、とは言っても、おそらくとりあえず移住させようとしているのが5,000人とか7,000人と言われているんですが、その人たちをいま移せるのかと言うと、移せないことはバングラデシュ政府も認めています。一定の準備をしたあとでないと無理だと。その準備には何年間かかる。それでも、移すぞ、と。「移すぞ」と言っているなかには、じつは私は怪しんでいるんですが、暗に「それでもいいのか」というロヒンギャの人たちに対するプレッシャーがある。実際にその発表があったとたんに5,000人ぐらい帰ってしまいました。そういう問題があるわけです。

片岡樹(京都大学) 薬の話です。お坊さんも捕まっているという話(タイムライン⑤2月6日報道)がちょっと引かかるのですが、ニュアンスとして、この国境地域では「主にロヒンギャが売っている」のか、それとも「ロヒンギャも売っている」のか。二択は難しいと思いますが、現場の観察してきた感触としては、強いと言えばどちらでしょうか。

高田 私は現場の観察をしていないんです。このロヒンギャがもっとも集中している地域には、外国人は行かせてもらえない。援助関係者もほとんど入らせてもらえません。なぜかと言うと、そもそもバングラデシュ側は、難民認定をぜんぜんしていないし、する気もないです。タイムライン②の2月1日報道にあるように、外務大臣がロヒンギャを「難民」認定するつもりはないとはっきり言明しています。

最新の現場の状況は私にはわかりません。しかしいろいろな情報を集める限り、薬物の密輸に圧倒的に多く手を染めているのはロヒンギャないしはシンジケートの人だと思います。それにもかかわらず、実際に今度はラカイン仏教徒のお坊さんが薬物の密輸に手を染めていて、しかも薬物をどうも寺に隠していたらしいんです。それがばれて捕まって、地元の論調では、「それでは困る」と。「『いままでそういうことをやるのはロヒンギャだったのに、仏教徒まで悪く言われるじゃないか』というような論調がある」みたいなことが報道されていました。したがって、薬物の密輸に関わっているのが数的に多いのは、やはりロヒンギャの人たちです。

ただし、ロヒンギャの人たちの弁護をしておきますと、当然、そういうことをやる人たちは一部です。これが1点です。2点目は、とは言っても、この地域で、では他にどうやって暮らしていったらいいんだと。ミャンマー政府にはむちゃくちゃ抑圧されるし押し込められる。そうすると、現実問題として、違法薬物じゃなくても、密輸などに従事する以外に、生きていく道はあまりないですよ。ですからやむをえない部分があると私は思います。